「歌念仏」を読みて

北村透谷

青空文庫

巣林子の世話戯曲十中の八九は主人公を遊廓内に取れり、其清潔なる境地より取り来りたる者は甚だ少数なる中に「お夏清十郎歌念仏」は傑作として知られたり。余は「歌念仏」を愛読するの余、其女主人公に就きて感じたるところを有の儘に筆にせんとするのみ。若し巣林子著作の細評を聴かんとする者あらば、逍遙先生又は篁村翁が許へ行かるべし、余豈巣林子を評すと言はんや。

中の巻の発端に「かゝる親には似ぬ娘、お夏は深き濡ゆゑに、菩提心と意地ばりて、嫁入も背ものび〳〵の」……と書出して、お夏に既に恋ある事を示せり、然れども背ものび〳〵といふところにて、親々の眼には極めて処女らしく見ゆる事を知らせたり。清十郎（即ちお夏の情人）が大坂より戻り来りたる事を次に出して、「目と目を合はする二人が中、無事な顔見て嬉いと、心に心を言はせたり」と有処にて、更に両人の情愛の秘密を示せり。

然に清十郎が沓脱に腰をかけて奥の方の嫁入支度を見て、平気にて「ハアヽ余所には嫁入が有さうな云々〳〵」と言ひしときにお夏が「又ねすり言ばつかり、おんなじ口で可愛やと云ふ事がならぬか、意地のわるい」と言ふ言葉を聞けば、お夏は既に処女にあらずして莫連者か蓮葉者のいたづらあがりの語気を吐けり。読んでお夏が「我も室で育ちし故、母方が悪いの、傾城の風があるのとて、何処の嫁にも嫌はるゝ、これぞ宜い事幸ひと、猶女郎の風を似せ」と云ひ出るに至りては、お夏が無邪気なる意気地と怜悧なる恋の智慧を見るに足るべし、「あの立野

の阿呆顔、敷銀に目がくれて、嫁に取うといやらしい」と云一段に至りては、彼の恋愛の一徹にして処女らしきところを蔽ふ能ず。

二人の情通露見したる時に、朋輩勘十郎の奸策同時に落ち来りて、清十郎が布子一枚にて追払はるゝ段より、お夏の愛情は一種の神韻を帯び来れり。清十郎の胸の中には恋の因果といふ猛火燃しきりて、主従の縁きるゝ神の咎めを浩歎して、七苦八苦の地獄に顛堕したるを、お夏の方にては唯だ熾熱せる愛情と堪ゆべからざる同情あるのみ。ひそかに部屋の戸を開きて外に出れば悽惻として情人未だ去らず、泣いて遠国に連よとくどく時に、清十郎は親方の情にしがらまれて得応へず、然るを女の狂愛の甚しきに惹かされて、遂に其誘惑に従はんと決心するまでに至りし頃、中より人の騒ぎ出たるに驚かされて止ぬ。美術の上にて言ふ時は、お夏のこの時の底から根からの恋慾は、巧に穿ち得たるところなるべし。

清十郎の追払れたりし時には未だ分別の閭には迷はざりしものを、このお夏の狂愛に魅せられし後の彼は、早や気は転乱し、仕損ふたら浮世は闇、跡先見えぬ出来心にて、勘十郎と思ひ誤りて他の朋輩なる源十郎を刺殺したるも、恋故の闇に迷へばこそ。清十郎既に人を殺して勘十郎の見出すところとなり、家の内外に大騒擾となりたる時にお夏は狂乱したり、其狂乱は次の如き霊妙の筆に描出せらる。

「あれお夏〳〵と呼ぶわいの、おう〳〵其所にか、どこにぞ、いや〳〵いや待て暫し、あれは我屋に父の声、我を尋ねて我を呼ぶ、親も懐しや、夫も恋しや、父は子をよぶ夜の鶴、我は夫

よぶ野辺の雉子」又下の巻に入りて「宵さこいと云ふ字を金紗で縫はせ」より以下「向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た、菅笠が、よく似た笠が、笠がよく似た菅笠がえ。笠を案内の物狂ひ」の一節。「なう〳〵あれなる御僧、我殿御かへしてたべ、何処へつれて行く事ぞ、男返してたべなう、いや御僧とは空目かや」の一節。「尋ぬる夫の容形、姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ぼんじやりとしてきつとして、花橘の袖の香に」以下の一節等は、いかにもヲフエリヤが狂ひに狂ひし歌に比べて多く愧ず。「フオースト」のマーガレツトが其夫の去りたるあとに心狂はしく歌ひ出でたる「我が心は重し、我平和は失せたり」の霊妙なる歌にくらべても、左まで劣るべしとは思はれず。

疑ひもなく「お夏」は巣林子の想中より生み出せる女主人公中にて尤も自然に近き者なり、又た尤も美妙なる霊韻に富める者なり。梅川の如き、小春の如き、お房の如き、小万の如き、皆是れ或一種の屈曲を経て凝りたる恋にあらざるはなし、男の情を釣りたる上にて釣られたる者にあらざるはなし、或事情と境遇の圧迫に遭て、心中する迄深く契りたるにあらざるはなし、然に此篇のお夏は、主人の娘として下僕に情を寄せ、其情は初に肉情に起りたるにせよ、後に至て立派なる情愛にうつり、果は極て神聖なる恋愛に迄進みぬ。

著者は元よりフオーストの如き哲学的生産の男主人公を作る可き戯曲家にはあらざりし。然れども清十郎の品格を※し来れば、忠兵衛、平兵衛、治兵衛、其他の如き暗迷の資性とは趣きを異にするところ多し、お夏の口にて言はせたる「姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき」に

て、既にその高品の心なる事を示し、追ひ払はれたる後に後悔の言葉、または末段の「虚言を云ふまじと、毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死んとは思ひも寄らず」より以下、句々妙味あり、述懐に於て其人品の異凡なる事を示せり。左ればお夏が愛情の自からに霊韻を含む様になるも自然の結果にて、作者の用意浅しと云ふ可からず。

余は此篇を以て巣林子が恋愛に対する理想の極高なるものと言はんと欲す。世に恋愛なるものゝ全く抽き去るを得て、凡て神聖なる宗教的思想の統御に帰する事あらば、恋愛のことを談ぜざるもよし、苟くも恋愛が人生の一大秘鑰たる以上は、其素性の高潔なるところより出で、其成行の自然に近かるべきは、文学上に於て希望せざるを得ざる一大要件なり。

抑も恋愛は凡ての愛情の初めなり、親子の愛より朋友の愛に至まで、凡そ愛情の名を荷ふべき者にして恋愛の根基より起らざるものはなし、進んで上天に達すべき浄愛までもこの恋愛と関聯すること多く、人間の運命の主要なる部分までもこの男女の恋愛に因縁すること少なからず。左れば文人の恋愛に対するや、須らく厳粛なる思想を以て其美妙を発揮するを力むべく、苟くも卑野なる、軽佻なる、浮薄なる心情を以て写描することなかるべし。

高尚なる意あるものには恋愛の必要特に多し、そは其心に打ち消す可からざる弱性と不満足と常に宿り居ればなり、恋愛なるものはこの弱性を療じ、この不満足を愈さんが為に天より賜はりたる至大の恩恵にして、男女が互に劣情を縦にする禽獣的慾情とは品異れり。プラトーの言へりし如く、恋愛は地下のものにはあらざるなり、天上より地下に降りたる神使の如きもの

なることを記憶せよ。野外に逍遙して芬郁たる花香をかぐときに、其花の在るところに至らんと願ふは自然の情なり、其花に達する時に之を摘み取りて胸に※まんとするも亦た自然の情なり、この情は底なき湖の如くに、一種の自然界の元素と呼ぶより外はなかるべし、之を打つとも破るべからず、之を鋳るとも形すべからず、之を抜き去らんとするも能くすべからず、宇宙の存すると共に存する一種の霊界の原素にあらずして何ぞや。

恋愛は詩人の一生の重荷なり、之を説明せんが為に五十年の生涯は不足なり、然れども詩人と名の付きたる人は必らずこの恋愛の幾部分かを解得したるものなり。而して恋愛の本性を審にするは、古今の大詩人中にても少数の人能く之を為せり、美は到底説明し尽くすべからざるものにして、恋愛の中に含める美も、到底説明し得るまでには到ること能はず、然れども詩人の職は説明にのみ限るにあらずして、説明すべからざる者をその儘に写し出るも亦た詩人の職なれば、詩の神に入りたる詩人の為すところは、説明に力を籠めずして、却つて写実に精を凝らすにありき。

写実とは云へども、世の所謂実際派の為すごとく、人間の獣慾を惟一の目的として描出するの謂にあらず、人間に不完全の認識あるよりして、何物かを得て之を贖はんとの慾望は天地間自然の理なれば、此慾望の一転して他の美妙なる位地に思慕を生ずる実情を描写するを、詩人の本領とは云ふなり。バイロンがうたひし如く、己の冷々たる胸に温熱を生じ、己れの頑剛なる質を和らげて、優柔なる性情を与ふるもの、即ちこの不完全が多少完全になされし徴なり、

これを為すもの恋愛の妙力にあらずして何ぞ。

「ロメオ・アンド・ジュリエット」の著者は、何が故にロメオが欝樹叢中に彷徨したりしやを記せず。彼は唯だロメオに自然なる一種の思慕ある事を顕はすに甘んじたり、一種の思慕とは即ち前に言ひし一種の原素なり、彼は此原素を説明せずして、この原素を写実したり。「ハムレット」の著者は明らかに人々をしてハムレットの恋愛に狂へる者なることを言はしめ、其ヲフエリヤとの問答に就きて之を確かめんとはせしめたり。これもロメオを書きし恋愛に対する極致と趣を一にして、唯だ是にては他に大なる不完全不調子の実現を備へたる点に於て異なるのみ。「フオースト」の著者が其主人公をしてマーガレットに近づかしめ、一瞬時に愛情を湧出せしめて、従前の不完全なる観想の大結局を恋愛の中に総べたるなど、恋愛の不可抜なる大原素なることを認むるにあらずんば能はざるところとす。

日本文学史を観じ来れば恋愛に対する理想、余をして痛歎せしむるもの多し。別して巣林子の著作の中に恋愛の恋愛らしきもの甚だ尠なきを悲しまざるを得ず。蓋し其の爰に到らしめしもの諸種の原因あるべし。万有教の教理寂滅の宗教思想より来れる関係、支那文学史との関係、気候風土より発生せる色情の悪風、其他区々あるべしと思はるれど、兎に角事実として、肉情より愛情に入り愛情より恋愛に移ることを記する著作の多きこと、疑ふ可からず。生命あり希望あり永遠あるの恋愛は、到底万有教国に求むることを得ざるか、そも〳〵いつかは之を得るに至るべきか、我邦文学の為に杞憂なき能はず。

「歌念仏」は巣林子の著作中、恋愛を自然なる境地に筴(は)めて写実したるもの丶上々なる事は、余の窺(ひそ)かに自から信ずるところなるが、自然は即ち自然にてあれど、何の生命もなく何の希望もなく、其初めは肉情に起し、其終りを愛情の埋没に切りて、「よし是も夢の戯れ」と清十郎に悟らせしめたるを見ては、仏教を恨むより外なきなり。文学の極衰極盛を言ふもの、今に之れありと聞く、余は極衰論者に其極衰のいはれを聞かんことを願ひ、極盛論者に其極盛の理(ことわり)をきかん事を望む、我邦未来の文学をいかにせばや。

（この論、極(きはめ)て不熟なり、編輯期日に迫りて再考の遑(いとま)あらず、読者乞ふ之を諒せよ。）

（明治二十五年六月）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「女學雜誌　三二一號」女學雜誌社
1892（明治25）年6月18日
入力：kamille
校正：鈴木厚司
2008年1月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「歌念仏」を読みて

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/